

終刊への経過と終刊号

——戦後帝大新聞史(6)——

河内光治

昭和六十一年九月十六日受理

【要旨】七月末にCIEから学生新聞の用紙再配分に関するメモランダムが発せられ、用紙の大幅削減を含め東大新聞はその存続を否定される。一方、南原総長の構想するユニバーシティ・プレス案も、八月末の本社理事会で承認され、本社は新しく「東京大学新聞出版会」に移行することになる。この相前後して起こった二つの事件が、以後絡まり合い、遂に東大新聞の命脈を断つことになる。以下、その複雑に錯綜した経過を克明に追ひ、客観的な事実を明白にしておくことが、本稿の最大の目的である。そして、前回に記録した部分を除き、終刊号の全貌を伝えることにする。

経過

昭和二十三年七月二十三日、GHQの民間教育情報局(CIE)の雑誌課長ドン・ブラウンから、学生新聞の用紙再配分に関するメモランダムが齎された。受け取ったのは編集局長の長谷川である。常務理事の桜井は青森方面に旅行中であり、編集長の仲尾のところでは母が亡くなる不幸があり、父を早く喪っていた仲尾はその後始末に追われこのところ新聞社には出ていなかった。その他、河内、川上、青山、田辺、阿部の二期生は、全員が卒論制作等のため帰郷中であつた。指令の要旨は次のようなものであつた。

現在発行されている全国の学生新聞に対する用紙の割当は、官学、

殊に東大に偏重しているので、これは公式に再配分されなければならない。再配分の基準は、在学している学生四人に週刊四頁の割合であり、在学生二千名以上の官公私立の大学高専がその対象である。そして、発行される新聞が、学生の自主性において編集発行される体制が取られなければならない。この体制の整っていない大学では、速やかにその組織を作り申請すれば、割当を受けることができる。以上の用紙再配分は、一九四八年九月から実施される。

これまで、GHQから直接指令を受けたこともなく、再刊以来、用紙割当庁から何のトラブルもなく順調に用紙の配給を受けて来た長谷川としては、この指令の内容は狐に抓まれたようなもので、その意味

することを正確に理解することはできなかった。当初は簡単に、各大学で学生新聞が復刊されたり創刊されたりして来ているので、それらへの基準を示したもののぐらいいに考えていたのであるが、事態は次第に明確になって来た。この指令は、東大新聞をその主たる対象にしていたのである。

長谷川は、桜井を呼び返し、仲尾にも連絡して善後策を協議する。先ず三人で割当庁に行き、次長の松宮に会見を申し込み、指令の詳細な説明を求めた。幸いなことに、松宮は社会学科の出身で、戸田理事長の教え子の一人であった。当然、桜井の先輩であり、而も東大新聞の戦前からの購読者であったから、新聞の性格についても、正確な認識を持っていた。

松宮の解説によれば、今度の指令は、民主化政策の一つであり、学生新聞の用紙割当の公正化、という一点に尽きること。そして、現在の東大新聞は、学生以外の者を含む財団法人であるから、学生が編集発行するという学生新聞の基本性格からはずれているので、九月以降は、学生新聞としては用紙の割当を受けることができない、ということであった。更に松宮は、現在の日本において万能であるGHQの課長が公表した指令である以上、いかなる例外も認められないことを忘れてはならないと付け加えた。つまり、この指令について、東大新聞の歴史的経緯や特殊性をいくら強調しても結局は無駄である、というのである。

そして松宮は個人的見解として、自分としては伝統ある帝大新聞の意義を充分認めているので、このまま消滅するのを黙って見過ごすのは非常に残念である。もともと帝大新聞は、東大の学生新聞というより、全国的な文化教育新聞なのであるから、この際、学生新聞の枠外で存続を考え、GHQの示唆する東大の学生新聞とは別の存在にしたかどうか。紙名とか組織とかを変更すれば、それは可能だと思ふと言った。

三人は直ちに戸田理事長に報告した。理事長は、話を聞くと、八月七日に緊急理事会を招集し、その席で、ブラウン課長の指示、松宮次長の見解を報告し、これに対処するため、週刊新聞と学生新聞に分割することを提案しようと決断した。

八月七日の理事会で、この理事長の提案は、あっさり否決される。銀杏クラブの奥山信一が、強硬に反対したのである。奥山は帝大新聞の事実上の創立者であり（本稿（1）参照）、銀杏クラブでは「团长」と呼ばれていた実力者で、当時東大新聞社では監事をしていた。彼は大量の九年以来の伝統と、敗戦後の既得権を考えれば、簡単には納得できないし、四十名に及ぶ従業員の生活を思えば、とてもこのような措置を受け入れることはできないと、主張したのである。これは又、GHQの一方的な指令に対する極く普通の反応であり、理事会の大勢の意見でもあった。結局、飽くまでGHQに掛け合い、東大新聞を現状のまま例外として認めさせるという基本方針が確認された。桜井や長谷川

は、先の松宮との会談から、それは不可能に近いことを説明したのであるが、とも角、次回二十三日の理事会まで、割当庁と接衝することが求められた。

ところが、この理事会の前に桜井は南原総長に呼ばれ、今回の用紙再配分について、自分が仲に立ってもよいと持ち掛けられた事実がある。これは、次のユニバーシティ・プレスの問題とも絡むのであるが、桜井は、総長が、現在の左寄りの編集方針、即ちレッド・コースを改める体制を作れば、指令は撤回されるだろうと言ったというのである。筆者の手許には当時の詳細な記録があるが、そこに桜井が言ったこととして記されている。今となつては勿論確証できるものではないが、南原総長が東大新聞に対して不満を持っていたことは明らかであった。当時の理事の一人である平岡敏男は、

南原総長や大内さんも東大新聞の紙面に批判的で、むしろ、つぶしたいという気が強かったのではないかと、想像されましたね。

〔『日本読書新聞』84・3・12、座談会「総合文化新聞の軌跡」〕
と言っている。そして、南原総長は復刊当時から、アメリカの大学の例を範にとつて、大学の中の新聞を含めた出版活動についてユニバーシティ・プレスの構想を持っていた。この具体的な内容については、前出の座談会の中で、同じく理事の一人であつた殿木圭一は、
南原さんは新聞を母体にして、出版と大学内のいろいろの印刷物をやる印刷の三位を一体にした機構をつくらうとしたわけです。

終刊への経過と終刊号（河内光治）

と言っている。この構想は、総長の意を受けて、加藤学生課長あたりから事ある毎に流され、大学の評議員会にも提出されて着々と準備が進められていたのであるが、総長はこの考えに従つて東大新聞の組織を変更すれば、現在の規模を維持できると考えたのである。即ち、総長は、東大新聞社に協組の出版部を加えてこれを大学の管理下に置き、全国的な知識人の機関紙としての東大新聞の発行、そして総ての東大教員の研究成果の出版を目指したのである。これは勿論、銀杏クラブの側にも伝えられていることであり、奥山等は編集の左寄りに対して明らかな不満を表明していたから、その点では総長と同じ基盤に立っていたと言えよう。奥山の例外として認めさせようという強硬発言は、総長との了解の上のことであつたのである。これは推測ではない。事実である。我々は知らなかったのであるが、七月末までに、銀杏クラブと総長の間で、移行についての了解がついていたのであつた。

UP（ユニバーシティ・プレス）移行に当たつての最大の問題点は、銀杏クラブの処遇であつた。従来の東大新聞社の理事会は、銀杏クラブから選出された理事と、銀杏クラブが推薦依頼した大学の評議員から構成されていたから、銀杏クラブが主導権を持っていた。そしてUP移行案は、先ず東大新聞社の理事会の承認を得なければならぬのである。そこで総長は、従来通りの銀杏クラブのヘゲモニーを認めた「東京大学新聞出版会」（以下（東大）と略す）の寄附行為の原案を作成し、銀杏クラブの了解を取っていたのであるが、総長は七月末に、こ

の付帯条件を無視した大学側の原案を学部長会議で、公式に発表したものであった。この時点で、銀杏クラブと総長の間では、合意が成立していたのである。八月七日の理事会にはこの原案も提出され、次の八月二十三日に検討されることになったのである。

桜井は仲尾を同道して再度松宮次長を訪ね、総長の意見を紹介した。松宮は言下に、現在の東大新聞の思想的偏向というようなことは、CIEとして聊かも対象に考えていない。若し、思想的なファンドが問題であるならば、CIEは用紙再配分などという姑息な手段を取らず、プレス・コードに掛けて、真正面からフェアに排撃するスタイルを取るであろう。ただその点について言えば、CIEとしては、現在発行されている大学新聞一般について、大学新聞連盟に加盟している各大学新聞が一つ残らず共産党系の機関紙協会に加入しているという事実、これは重視している。指令の中の学生の自主的編集ということは、非政治的ということを含んでいるもので、それ故に、用紙割当再配分の時に、学生新聞の発行体制、組織が条件になっているのである、と明快に説明したのである。

東大新聞は、大学新聞連盟発足の時からこれに加盟し、田辺が代表として出席していたのであるが、二十二年秋頃から主導権争いのごたごたが続き、東大新聞としては、単なる学生新聞ではないという認識の下に、もっと自由な立場を確保するという理由で、昨年十二月に脱退した。直接の原因は本稿(4)で触れた通り、"大学新聞用紙の公平

均分化の名目で連盟の名において参衆両議院に不備且不明朗な請願書を提出した"ことに抗議して、これが否決されたためであるが、この請願が今回のCIEの決定に関係しているかどうかは不明であるが、用紙配分の東大偏重という声は強かったのである。これは戦時中に統合された『大学新聞』(本稿(1)参照)の実績を、復刊『帝大新聞』がそのまま引き継いだためと言われているが、帝大新聞は正規の手続きを経て用紙の割当を受けていたから、これは問題にならない。

そして、本紙はこの二月に、「非日刊紙の相互利益を擁護する」目的で結成された「第一新聞協会」に加入を認められ、その会員になっていた。この事実は、松宮次長も初めて知ったと言い、これは、東大新聞が学生新聞の枠外であることを証明しCIEの問題とする大学新聞連盟の思想的ファンドについても、東大新聞の立場を充分に説明できる材料だと、見解を述べた。然し残念なことに、用紙の割当を「第一新聞協会」を通してでなく、学生新聞の枠内で受けていたことが、この際、決定的なことであったのだ。松宮次長は、そのことを大変悔しがった。

八月二十三日を前にして、仲尾は二期生全員に「スグデテコイ」という電報を打ち、筆者も卒論の執筆途中であったが、八月二十日に上京し、直ちにこの絡まり合った状況の中に組み込まれてしまった。

八月二十三日の理事会は、総長と完全に結託した銀杏クラブの理事監事によって、クーデターとでも呼ぶべき事態を出現させた。即ち、東

大新聞社と協組出版部が合併して新たに「東大新聞出版会」を作るのではなく、東大新聞社の寄附行為の変更という事務手続きで済ませたのである。内容は、大学側の公表した原案そのままで、理事会で承認された後、続いて開かれた評議員会でも異議なく承認された。

これらのことは、戸田理事長、桜井常務理事、長谷川編集局長、の誰もが事前に相談を受けていなかった。勿論仲尾編集長も寝耳に水であった。その報告を聞いた二期生全員は怒り心頭に発した。銀杏クラブの一部への絶対的な不信感とともに、UP粉碎の決意をこの時、固めたのである。新聞は八月十九日の10851086号の次ぎは九月九日の10871088号である。これに、編集部声明、闘争宣言を載せることを決定した。

大学側は、手回しよく直ちに新寄附行為に基づき、我妻教授以下十一名の評議員を決定し、銀杏クラブも九月一日に幹事会を開いて十一名の評議員を選出し、東大新聞出版会の第一回評議員会は九月中旬に招集されることになった。つまり、ここで理事会が成立すれば、今までの体制は総て白紙の状態になり、新理事会の人事権の前に全く無力で立ち向かわなければならなくなる。桜井は八月二十三日付けで戸田理事長に辞表を提出した。

一方、割当庁は八月二十五日、正式に再配分の日程を明らかにした。指令によれば九月一日から実施になっていたが、その完全な適用は来年の一月からということになり、それまでの間は準備期間とされた。東大新聞については、現在の用紙割当を漸減し、来年の一月には規定の

七〇〇ポンドまで落とす、それまでに、指令に示された学生新聞としての条件を整えなければならない。そしてブラウン課長の意見として、各大学新聞が自分の割当分を提供すれば、総合的な大学新聞を作ることは可能ではあるが、現在の東大新聞がこれに当てはまるとは考えていないと付け加えられていた。

これを受けて、翌二十六日午後六時半から湯島の文化会館で、戸田理事長と松宮次長の会談が行われた。これには、桜井、長谷川、仲尾、河内、が陪席した。戸田理事長からUP成立について詳細な説明があり、意見を交換した結果、次のことが確認された。

一、学生新聞はあくまでも学生が主体となって経営編集するものでなければならないこと。この場合、指令の中で、大学が認めたものと表現されているのは、幾つかの団体が新聞発行を企画した時、大学が割当庁に事務的に連絡することを言っているのであって、大学側の意向によって学生の自主性が侵されてはならないこと。従って、UPは学生新聞と認められないから、来年以降の用紙割当は受けられない。

二、学生新聞の総元締めとも言うべき全国的な文化新聞の必要性は、ブラウン課長も認めているものだが、東大偏重打破という建前からすれば、その基盤は広く全国の国公立の大学に求めなければならない。従って、UPがこれを発行することは不可能である。

三、非日刊の週刊新聞の用紙の再配分、第一新聞協会の請願に対する増配措置、そして新規割当の検討が今年中には行われる見通しがある

こと。

この結果、現在の東大新聞がUPに移行しようがしまいが、来年の一月には用紙の割当は一切受けられなくなり、自滅する以外道がないので、唯一の打開策として新しい文化新聞の設立を請願し実現すること、新しい学生新聞については、学生自治会中央委員会が中心になって早急に組織作りをするように働きかけること、そしてCIEに、今回の措置に対して正式に抗議文を提出すること、この三点が決定されたのである。新週刊新聞の内容は、東大新聞の定期購読者を引き継ぎ、現従業員の全面吸収を目標にして、全国各大学への基盤を拡大する方向で組織を作る、というのが妥当であり、これを諮るため、理事長は理事会を招集することになり、九月二日、好仁会と決定された。

編集部としては収拾の方向が大体決まったと見て、三期生の木村、山本を呼び、今後の方針を協議した。二人が中心となって一年生とともに編集を続ける。木村は自治会の関係があるので二期生と行動をとにもすることもあった。そして九月九日号の対策である。まず、UP移行の経過と、CIEの指令について、事実を正確に報道することが第一という長谷川の主張が通り、編集部声明、闘争宣言は、もう少し事態の推移を見てからということになった。この時、長谷川は、UP移行の経過はデータを揃えたから自分に書かせて欲しいと発言した。誰も異議はなかった。日頃穏和な長谷川のこの申し出は、心中期するものがあると感じさせた。イントロと主文は仲尾が書

くことになった。1087 1088号の題字横、十一段の記事がそれである。

五八

横(2)「懸案の University Press」を二段通しのイントロの上に置き、(3)「本社、協組出版部を合併、「新聞出版会」設立へ、用紙問題で難行の兆」、(1)「設立の経過」、(2)「学生新聞に増配、四人に一枚の割当」、横(2)「学生新聞割当表」、(1)「松宮次長との一問一答、公平に機会を与える」、(1)「東大新聞は七〇〇ポンド」、と記事が続いている。イントロに続く主文は、

今回決定を見た「財団法人東京大学新聞出版会」寄附行為は「財団法人東京大学新聞社」寄附行為を基としてつくられたものであるが、この二者の根本的な相違は次の点である

(一) 組織的に前者が総務部、新聞局、出版局とに分け重要人事を理事会が握ること

(二) 評議員の選出法が後者は本社銀杏クラブ側から大学側の評議員を依頼したのであるが、前者では正式に大学代表として評議会で選定される

現在決定をみた評議員は次のとおり

大学側Ⅱ我妻栄、宮沢俊義(法)、鈴木信太郎、尾高邦雄(文)、矢内原忠雄、佐々木道雄(経)、山口吉郎(一工)、鮫島実三郎(理)、北村包彦(医)、東畑精一(農)、星合正治(二工)の各
 教助教授

銀杏クラブ側Ⅱ奥山信一、岡部一郎、伊藤好道、増田寿郎、平岡

敏男、殿木圭一、高松棟一郎、椎野力、沢開進、瓜生忠夫、桜井恒次の諸氏

なお右の新財団法人の総務部、新聞局、出版局の内部機構については未定である

ユニバーシティ・プレスは総長の「全学一体」の考え方にもとずき、ユニバーシティ・イクステンションを目的としたもので、総長は東大新聞を大学の御用新聞にする意向ではない旨言明しているが、

(一) 今までより編集に対する制限が理事会により加えられると憶測される点、(二)「全学一体」を基礎とするにもかゝらず、学生からは理事会に代表が出ていない点、(三)用紙削減による東大新聞社の経営縮小により、ユニバーシティ・プレスとしての機能を果すだけの経営規模を持ちうるか

の三点に今後の問題を残すものとみられている

と編集部を受け取り方も織り込んだものである。続く「設立の経過」も、全文を載せる。

東京大学新聞出版会設立は、オクスフォードやハーバート大学等のユニバーシティ・プレスの構想を東大でも持ちたいという、南原総長の年来の宿題に端を発しており総長から前東大新聞社常務理事野沢隆一氏に対し、本社と協組出版部とを合併してユニバーシティ・プレスを設立したい旨の申入れがあったが、昨二十二年

終刊への経過と終刊号(河内光治)

二月問題は表面化し野沢氏を通じて本社理事会に提案された

本社理事会は最初は「財源のあてもなく伝統ある東大新聞を大学のユニバーシティ・プレスに移行解消することはない」という見解で問題とならなかったが、同年夏から秋にかけて、前記野沢氏の外銀杏クラブから奥山信一氏(本社監事)、久富達夫氏等が数回総長と会見し加藤学生課長らの手になる「財団法人東京大学出版会設立要綱案」を中心に検討の結果、やはり「東大新聞をユニバーシティ・プレスに解消させる必然性はない、強いてつくるなら東大新聞社の外に設立して二本立で行くべきだ」という見解に変わりはなかったが総長の「ユニバーシティ・プレス一本立で行ってほしい」旨の懇望が強く前記三氏は総長に同意した

これに対し銀杏クラブ幹事会では本年一月末「東大新聞の自主性を認めないのでは弱るが総長の懇望が強いならば銀杏クラブが主体となって設立してもよい」との妥協的見解を以て、大学当局との交渉委員を前記三氏に代って本社理事である岡部一郎(朝日新聞社印刷局長)、殿木圭一(共同通信社整理部長)、平岡一郎(毎日新聞社論説委員)の三氏と決定した、しかしここに至るまで大学側が本社理事長や常務理事に正式の交渉なく、一部先輩の手を通して設立要綱を示してきた点は問題とされた

以後三委員は総長と会見の後本年七月始「財団法人東京大学新

聞出版会寄付^(ママ)行為案」を現在の東大新聞社寄付行為を基として作製、移行に当っては、財団法人の新設の形でなく定款及名称の変更で行くことを決定した

この案は東大新聞社寄付行為とはほとんど変りがないものであるが、組織上「新聞局」「出版局」に分け評議員の選出母体を正式に大学評議会と银杏クラブの二つと規定している点が異なる、これに對し七月二十一日银杏クラブ拡大幹事会では

- (一) 「新聞出版会」で出す新聞は、大学の機関紙ではなく、学生の新聞であることを、目的の中にはっきり示すこと
- (二) 新聞の編集及運営の自主性を確保するため、大学側の役員選出に当って、银杏クラブに下候補を選定させる慣習を持續すること

の二つの有力意見が出た

一方大学側では夏期休暇中の学部長会議で同案を検討し、組織として新聞、出版両局の外に経理を担当する総務部を設けることを付加して承認し、八月末には右の有力意見に関係なく大学側の評議員の人選を終った、そしてこの大学側修正案が八月二十三日の本社理事会と評議員会を通過し、正式に「東京大学新聞出版会寄付行為」は決定をみたわけである

しかし設立決定に至るまで合併される協組出版部担当者に一回の交渉もなかった点や银杏クラブ拡大幹事会の二つの有力意見がと

り入れられなかった点など今後の大学と新聞出版会との関係ともつながりがあり今後問題を残すとみる向がある

帝大新聞入社以来十年のキャリアを持つ長谷川が、その記者魂を賭けて取材し、精密に描き出した経過の記録である。総長と银杏クラブの裏取引というか、理事長以下の執行部を無視して実現された背信行為の実態が、白日の下に明らかにされたのである。

同号の主観客観も用紙再配分の問題を取り上げ、「学生新聞とは、新聞技術習得のために、学生が自主的に編集、経営を行う新聞」という定義が、「学校当局の学生新聞への干渉の口実とならなければ幸である」とその真意を説明し、「用紙増配を機会に、各学生新聞が学生の世論を恐れずに堂々と反映させて、生き／＼とした紙面をつくってもらいたい」と結んでいる。

九月一日に银杏クラブの総会が開かれ、UPの評議員が選出されたが、殆どの会員はこの突発事件の詳細を初めて知らされたわけで、誰もがCIEの措置を不当だと言うが、如何せん、オキユベイド・ジャンという冷徹な事実の上では、CIEの一課長のメモランダムさえ動かし難い権力の発現であることを思い知らされただけであった。ただ評議員に、桜井のほか、瓜生、沢開、椎野と編集部に馴染みの先輩が選出されたのが、幾らか救いであった。

九月二日に戸田理事長が招集した理事会は、银杏クラブの理事の都合がつかず流会となり、理事長と奥山が会談して改めて決めることに

なった。六日に桜井、長谷川も加わって会談が開かれ、十日に開くことになった。

編集部の仕事は山積していた。CIEへの抗議文の作成、それに添える資料の整理と翻訳、新週刊紙の申請書の作成、それと同時に、新聞協会、第一新聞協会への働きかけ、新聞用紙割当委員会の各委員への陳情。そしてその間に、協組出版部との話し合い、自治会中央委員会との交渉を行わなければならない。協組との懇談会は三十一日に行われ、UPは民主的な全学的組織の上に作られなければならないという基本方針が確認された。翌九月一日、自治会中央委員会と懇談会を持った。ここで自治会の側も漸く問題の所在が分かったようである。新生新聞の組織作り、UP対策も含め、現在展開されている教育復興闘争の中に具体的に組み入れることが確認された。これで総論段階は終わったものとして、今後の分担が決められた。割当庁関係は仲尾と河内、新週刊紙は川上と阿部、自治会は木村、学内のUP対策は田辺と青山、である。

その頃、松宮次長からの情報で、新週刊紙の申請はなるべく早い方がいいが、既に八百件の申請を抱えているので、そう簡単に許可される見通しは立てられない、というのがあった。河内からその報告を受けた一同は、この闘いが容易なものでなく、長期戦を覚悟しなければならぬのかと、がっくりと肩を落とし顔を見合わせたのであった。この夏休みの前まで夢想だになかった新聞の発行が不可能になるとい

うことが、実感できなかった。桜井は鵜沼に引っ込んで絵でも描きたいと言うし、長谷川は水虫がひどく素足に下駄を引きずっているし、仲尾は乾性肋膜炎と診断されたと言ってげっそりしているし、一同の意気は上がらなかった。

九日の編集会議では、自治会の中に作られたOP (Organ Paper = 学生新聞) 準備委員会の代表が明日総長に面会するという報告があったので、仲尾と木村がすぐ代表に会うことになった。そして、明日の理事会でUPが成立することになるが、これを黙って見過ごしていいか、という話になった。移行したとなれば、その事実を報道しなければならないし、それに対する編集部の態度も表明すべきであろう。それには、業務の組合と歩調を合わせた方がいい。業務の方ではこの六月に組合が結成されていた。やがて仲尾と木村が戻り、いきなり総長に会うのはまずいから延期させることにし、OP準備委員会と編集部との打ち合わせ会を十一日の午後四時から開くことになったと報告され、了承された。理事会に対しては、抗議を兼ねて声明書を出すことにして、仲尾が原案を作り、明日トロッコ会の総会を開いて決定し、業務の組合に提携を申し入れることになった。

仲尾の原案を修正して承認された声明書は、移行経過の不明朗さの責任を問い、大学の管理下に置かれることには根本的に反対であると態度を表明し、移行後も従来通り編集部の編集権、人事権は尊重することを要求したものであった。編集部の申し入れを受けて、業務の組

合は直ちに執行委員会を開き、UP移行については、現在の人員をそのまま引き継ぐこと、待遇改善をすること、配置の転換その他については組合と協議すること、という申し入れ書を提出することを決め、組合大会を開いて可決し、桜井に渡された。こうして、桜井、長谷川、仲尾は、編集部、声明書と業務組合の申し入れ書を持って、東大新聞最後の理事会に出席したのである。待っている間に、川上の作った読者の意識調査の往復葉書の宛名を書くことにした。これは、新週刊紙を申請する時の読者の支持の証拠として添付するためのもので、読者の抽出方法について意見が分かれ、諍々と議論しているうちに、業務の方では単純に固定読者から書いてしまったという一幕もあった。

九時過ぎ、理事会を終えて三人が帰って来たが、結果は予想に反し、東大新聞の存続は断念し、これを引き継ぐ新しい週刊新聞を申請する、新しい学生新聞にはUPは関係せず、これは学生自治会に任せる、そして、編集部、業務組合からの申し入れは総て認め、UPの評議員会に責任持って引き継ぐというものであった。

その夜、河内と川上は当時住んでいた九段の学生会館まで歩いて帰りながら、情勢を分析した。UPに対しての考え方で、银杏クラブと総長II大学側とは、かなり差があること、総長は大学の管理体制の下での新聞出版の編集発行を意図しているが、银杏クラブ側では大学を批判して来た帝大新聞の伝統は守ろうとする意思が強いこと、これが明瞭になった以上、攻撃の目標は大学側に絞らなければならない。そ

の結果、UPの中で我々の企図する週刊新聞発行の可能性もあること、然し、大学側の防御は堅いと見なければならぬから、その時はUPを粉砕して我々だけで週刊紙を作る、できればその時、银杏クラブの協力が得られれば最善であるが、これは当てにしない、このため、次号の新聞を最大限に活用する、これを二人は「九段テーゼ」と呼ぶことにした。

翌九月十一日は土曜日であった。午前中は手分けして担当部署を廻っていた仲間が集まったのは午後二時過ぎであった。河内と川上から、二つの戦略が提案され、闘争を公然化することは当然であるとして承された。三時過ぎ、戸田理事長が来社して桜井に会い、これから银杏クラブの奥山、殿木と総長に会おうが、新聞局長は誰にするかと言われ、桜井は長谷川でいいと答え、会見の様子は、夕方電話して聞くことになった。又、この日は、自治会、協組との会談も行われた。

七時過ぎ、殿木から桜井に電話があり、月曜午前中に桜井、長谷川に会いたい、午後は戸田理事長を入れて編集部と話し合いたいということであった。戸田理事長と総長の会談が終わり、何らかの進展があったと思われるので、桜井が理事長に電話すると、色々話があるというので、桜井は直ちに関口台町の屋敷に向かった。

十一時過ぎ、桜井が戻って来た。眼に見えて憔悴していたが、奥山、殿木の他に野沢も同席していたという会談の様子は次のようなものであった。

一、前号のUPの記事は移行が極めて不利であることを主張したものである。そして「設立の経過」には事実誤認があり、訂正されなければならない、筆者は桜井と思われるので責任を取って貰いたい。

二、UPの常任理事には、岡部、平岡の二理事が不在なので、取り敢えず殿木が当たることとする。新聞局長は長谷川とする。これには、奥山、野沢が反対したが、戸田理事長が押し切った。

三、今後の紙面作成については、殿木が監督することになり、前号のような編集部独走が二度と起れば、直ちに休刊の措置を取る。

四、総長は、来年一月から発刊される学生新聞を、新聞研究所の実習紙にしたいと言明した。

これを聞いた時、一同から、ほほうという嘆声とも何とも形容のつかぬ声が洩れた。余りにも、総長が単刀直入にその野望を明らかにしたからである。終わりに、戸田理事長は桜井の辞表は八月二十三日付で預かっているので、責任を取らせるということではなく、これを受理することにして、と言って妥協したとのこと。

一報告が終わると、既に十二時を過ぎていた。占領軍の命令によって実施されていたサマータイムの最終日が終わっていた。対策は明日改めてすることにして解散したが、事態は緊迫し、いよいよ最終段階に入ったという実感が強かった。

翌九月十二日の日曜日、午前十時から二期生、三期生の全員に学生書房の金原を加えて会議が開かれた。桜井は辞めた以上遠慮すると

終刊への経過と終刊号（河内光治）

言い、長谷川は昨日から来ていなかった。そこで決定されたことは、次の通りである。

一、次号九月十六日付けの一面に、編集部声明、業務組合の申し入れ事項、UP移行に対する闘争宣言、を発表するとともに、今までの経過を記事として纏め、論説では編集権についての基本的姿勢を取り上げる。然し、いずれ殿木が記事にも眼を通し、大組にも立ち合うだろうから、これを強行する手段も慎重に検討し、新聞を最大限に活用する。

二、この非合法手段を取る時、長谷川が編集局長として留任することは事態を悪化させるので、明日の殿木との会見の時は、態度を保留して貰い、火曜水曜と休み、新聞が発行される木曜日に拒否の通告をして貰う。

三、休刊、解散という事態に備え、闘争資金を準備しなければならないので、現在進めている公務員法改正のパンフレットを早急に作り上げ、販売は学生書房に協力して貰う。

四、新聞が発行される木曜日を期して、闘争宣言のビラを学内外に撒く。

五、自治会中央委員会、協組、東大職員組合に申し入れ、広範な全学的闘争態勢を組織する。

そこで直ちに、仲尾と河内が千葉県大網の長谷川を訪ねて了解を得ることにし、他の者はパンフレットの内容見本、広告ビラを作ること

にして、散会した。

長谷川は、前号の「設立の経過」については、事実誤認などは絶対ないから訂正する必要はない、と強硬であった。新聞局長留任については、勿論拒否するが、編集部都合があれば暫く保留してもよい、と言った。次号については、編集部の意見を表明することには賛成だが、責任が戸田さんにかかるようなら考えなければならない、という意見であった。明日の編集部との話し合いに戸田さんが出て来なければいいが、それは有り得ないと断言した。論説は一般的なものにすれば問題はないということで、記事はいつでも自由に差し替えができるように囲み物にすることにし、論説は河内、記事は仲尾が書いて、明日の編集会議に出すことにした。然し長谷川は、非合法的に強行することには最後まで反対した。結局、明日の理事長、理事との会談の後で決めることにした。

翌十三日午前の殿木・長谷川会談では具体的なことは何も出なかった。三時半からの会談は、終始理事長がリードし、殿木は殆ど発言しなかった。桜井辞任の後の常務理事は欠員とするから、理事長に一切報告相談すること。そして新聞局長には長谷川に留任して欲しいと、要請したが、長谷川は健康上の理由で辞退した。理事長は、自分の病欠は認めるが、その間の代理は仲尾がするようにと言った。仲尾が決っていると、理事長は、常務理事欠、局長病欠、代理なしでは、新聞は休刊するより他方法がないな、と冗談ともつかずに口にした。更に、前

号の記事については訂正は求めないが、「僕は本当に不愉快だった」と繰り返した。結局、病欠が認められたとはいえ、新聞発行の責任は長谷川に押し付けられた形で会談は終わった。

直ちに編集会議が開かれた。この機会を逃したらもう紙面を利用することはできないから、思い切って断行しようという非合法派と、戸田、長谷川が責任を負う紙面である以上、二人の意向を無視することはできないという合法派と、真つ二つに割れてしまった。このまま反対声明も出さずにUP移行を漫然と見送るのは、編集部の良心に反するという心情派、大組に殿木が立ち合ったら、実際に差し替えができるだろうかという懐疑派も現れ、議論は果てしなく拡がって行った。途中で桜井が来て挨拶したいと言う。桜井は口籠りながら、戦前からの十三年に及ぶ新聞生活を振り返り、大学の御用新聞にだけはならないで欲しいと、別れの言葉を結んだ。桜井を中心に復刊以来二年半を過ごして来ただけに、さすがに胸の塞がれる思いで、座は湿っぽくなっていた。桜井が出て行った後は議論も続かず、割り切れない気持ちのまま、何となく合法の線で落ち着いてしまった。

この反省は、余りにも新聞の発行にこだわり、その紙面の利用ということだけを考えていたのでは、これ以上の前進は望めない、編集部の自主性を確立するためには、UPの正体を暴露し、新聞以外の武器も取って闘わなければならないということであった。

十四日には、OP準備委員会と総長と、二つの会議が予定されてい

た。準備委員会には、河内と木村が出席し、なるべく早く総長と会談してその確約を取り、実務担当の新聞委員会を発足させるよう要請した。新聞委員は公募するのが当然であるが、東大新聞編集部としては、現在の一年生の編集員を全員応募させて協力すると約束した。

総長の方には、仲尾、川上、田辺が行ったが、総長は、自分はUP誕生の産婆役をただけであるから、今後の運営については東大新聞の理事会に委せ、口出しをするつもりはないと言っただけであった。そこで理事会の方針をただすことにして殿木理事に連絡したところ、八時に来社することであった。業務の組合に連絡し、代表二人に出席して貰うことにした。

先ずUPの経営方針を訊くと、殿木理事は笑いながら、まだ何もない、と答えて一同を啞然とさせた。では銀杏クラブではUPのことをどう考えているのかと訊くと、正式の代表ではないかと前置きし、総長は色々抱負を持っているようだが、銀杏クラブの全員が移行しなければならぬ必然性は持っていないと思うと断言し、帝大新聞の伝統と実績からして、移行しても実質的には何ら変化はないと思っていると答えた。然しUPの寄附行為によれば大学側の権限が大幅に拡張されているので、編集部としては不安である、と言ったが、そんな心配はないと言っただけであった。十一時過ぎ、編集部はUP移行に全面的に反対なのか、条件付きなら賛成なのか、それをはっきり返事して貰いたいと言われた。それはトロッコ会の総会を開いてからでなければ、

終刊への経過と終刊号（河内光治）

と保留し、次回を十八日の土曜日の十二時と決めた。新聞発行の木曜日まで引き延ばさなければならなかった。一応の結論が出たところで、河内と川上は先に帰った。明日の大組で強行突破の可能性が出て来たので、その検討をしようというのである。

ところが殿木はその後仲尾を掴まえて雑談し、親愛の態度を示していた。そこへ隣の会議室で大組の割り付けをしていた一年生が入って来て相談をした。明日が大組なのか、それは大変だと、先輩らしく殿木は立ち上がった隣部屋に入った。そして大組用のゲラに眼を通し、編集部声明その他を見た。さつと顔色を変えた殿木は、自分が心を尽くして編集部に歩み寄り、よき理解者たらんとして努力していたと自認していたから堪らない。文字通り激昂し、私は騙されていた、諸君がこんなに卑劣だとは思わなかった、もう一切信用できないと、ヒステリカルに怒鳴り始め、仲尾や田辺が何と言っても聞き入れず、明日理事長と相談すると言って帰ってしまった。二人は取りあえず、深夜の町を九段の学生会館の河内と川上のところへと急いだ。四人になったところで名案が浮かぶはずもなく、ただ目標は管理体制を敷こうとする大学当局なのだから、ここで現理事会と事を構えるのは、得策ではないということだけは、はっきりした。そこで明日の大組は、理事会の意向に添うことにしようということになった。

翌日、殿木は朝日新聞社の大組の現場に来たが、理事長には連絡がつかないし、自分としては理事としての責任が持てないから、先輩の

岡部理事に相談すると言って出て行った。午後になって同じ建物の六階にいる岡部から仲尾に会見したいと電話があり、仲尾はゲラを持って行った。岡部は、UP移行反対の記事は載せないで欲しい、OP準備委員会の記事は、客観的な事実報道であるから差し支えないと思うし、論説も結構だということなので、仲尾は前夜の打ち合わせに従って承知した。岡部は喜びを隠さず、仲尾と一緒に下に降りて来て、下版まで付き合った。そしてその間の雑談の中で、今度のUP移行については、銀杏クラブとしては総長の面子を立てるための義理を果たしただけで、帝大新聞以来の在野精神は固く守り、大学の管理機構の中に組み入れられるようなことは絶対にさせない、と断言した。

1089号の(2)「東大自治会中心に、新聞設立準備委員会生る」がそれで、準備委員を代表して武井君の談話が載せてある。論説は「学生新聞の自主性」で、三つの論点から成っている。第一は、日本新聞協会の「新聞倫理綱領」に謳われている報道評論の基本的自由で、「筆者は常に訴えんとするもその手段を持たない者に代って訴える気概を持つ事が肝要である」を引用し、「学校当局の恣意的な干渉は報道評論の基本的自由の侵害として断乎排撃されなければならない」としている。第二は、その非商業性で、真理追及の純粹性を貫くことができる立場にあるということ、そして第三に、幾つか実例があるが、学校の実習機関になつてはならぬということで、出来るだけ自主的な独立経営を計る様に努力しなければならない」としている。

この間に、業務に対しては広告代理店などから種々の働きかけがあり、編集部としては明確な対応を闡明しなければならなくなった。問題が入り組んでいるので、外部には何が何だか分からないであろうということになり、それを説明するUP反対の趣意書を至急作ることにした。翌日、その作業をしているところに長谷川が来て、理事長が今日会いたいとのこと。桜井からも連絡があつて仲尾と河内が行くことになつていたので、理事長には長谷川と川上が行くことになった。桜井は、外から見ていると全く分からないので、積極的に外部に働きかけなければならぬのではないか、ということであつた。

戸田理事長は、殿木からも聞いたらしく、UP移行までは現理事会の意向に反した記事は絶対に載せないと約束するかどうか、明日十時までに返事してくれ、ということであつた。イエスなら自分が全責任を負う覚悟であり、ノーなら辞めるつもりだということ。その報告を受けて、二期生は悩んだ。この頑固な老人を誰もが尊敬、畏敬していた。若輩に対しての温かい思い遣りがいつも感じられた。総長相手なら、とことん反抗してもいいが、戸田さん相手じゃ困る、というのが実感である。この際、そういう前近代的感情に左右されてはならない、という威勢のいい意見も出たが、イエスと回答しようということになった。これは無条件降伏である。武装を解除されたのである。重苦しい敗北感が一同を包んだ。翌日、長谷川と仲尾が理事長に会い、イエスと返事した。理事長は、一時の偽装じゃないだろうな、僕が理事

長でいる間は理事会の意向に反する編集はしないということだよ、と念を押した。

九月二十一日、東大新聞の評議員会とUPの新評議員会が午後三時から山上御殿で開かれ、UPの銀杏クラブ側の理事、大学側の理事を選出、理事長には大内教授を選任、交渉することになり、常務理事は当分欠員のままということになった。

九月二十三日の100号が出た後、仲尾は戸田理事長に呼ばれた。理事長の話は、大内教授は自分で学生新聞綱領のようなものを作り、それを編集部が認めれば就任すると言っている、これでも分かるように、今度のUP理事会は東大新聞の理事会とは違って極めて保守的であり、今までのような或る意味での家族的共同体としての意識は全く期待できないこと、正式に移行するには、二週間ぐらいかかると思うが、その間は自重して欲しい、又、銀杏クラブでは奥山が退くということ、全体に若返ったから、こちらは期待できるだろう、ということであった。そして戸田さんは、君達は来春卒業だし、学外で何かやるつもりだろうが、当てはあるのか、と心配してくれたという。仲尾からその話を聞いて一同は涙線を刺激されたが、戸田さんへの敬慕が一転して大内教授への敵愾心となって固まって来た。

UP移行を認め、紙面を利用しないと約束したのであるから、ここで編集部を考え方を正式にUP理事会に申し入れるべきだということになり、桜井も交えた会議で次の六項目を決定した。

終刊への経過と終刊号（河内光治）

一、新聞・雑誌の編集は従来通り、編集部自主性を尊重すること。
二、新聞・出版の両局長は編集部の推薦によること。
三、新聞・出版両局の内部機構は編集部と協議して決めること。
四、用紙増配、新規割当が受け入れられない場合は、UPと分離した新しい週刊新聞の発行を認めること。

五、資金導入の時は、その資金の性格及び条件について、予め編集部及び業務組合と協議すること。

六、創刊される学生新聞は学生の自主的運営に委ねること。その主体は学生自治会中央委員会が適当である。

この申し入れに対し、殿木理事は、いずれ大内教授から回答があると思うと、甚だ曖昧で、過渡期の不安定さを如実に示していた。

編集部としては、正式に山本を編集長代理として新聞の編集を委せ、二期生は、新週刊紙の申請と、パンフレットの発行に全力を注ぐことにした。パンフレットは、「政令問題の焦点——公務員法改正をめぐる」とタイトルも決まり、B6判一二八頁七〇円の予定で既に印刷所に廻されていた。然し新聞社で出すわけには行かないので、独自の資金を用意するか、他の出版社の協力を求めなければならなかった。『季刊大学』の別冊のようなジャーナリストティックなもので、正規の配給ルートは引き受けず、仲尾と河内で、進歩的な出版社を十軒廻ったが、いずれも断られた。桜井は信州大学の学生新聞発刊の記念講演のため、九月二十九日に長野に出発していたが、最後の交渉が不調に

終わった十月一日の夜、仲尾と別れ、河内も長野に向かった。結局これは、労働組合その他を通して直接販売することになる。

1090号の「音叉」に、「学生新聞の用紙割当」という地方一学生・碓井立雄の投書が載っている。「読者層の大きさに応じた用紙割当こそ最も適切な方法ではなからうか」というものである。

1091号に横「協組理事会」、(2)「出版部」分離でもむ、今後は準備委員で協議」がある。二十六日の理事会で南原理事長からUPの説明があり、これに対し会計監事佐々木教授から出版部がUPに吸収されると協組の経営が不可能になる旨発言があり、次いで専務理事大内教授と出版部分離反対の協組側の間で討議が続けられたが結論を得ず、UPの理事会と交渉する準備委員会が設けられたというものである。この号にはもう一つ、(1)「桜井常務理事辞任」もある。

1092号の「主観客観」は編集部が先に行った読者調査の結果を取り上げている。記事にするわけにはいかないというので採られた苦肉の策である。東大新聞の存在を希望するかの問には、殆どが希望すると答え、編集方針も九割近くが支持している。

1092号は十月七日付けの発行であるが、UPには動きがなく、編集部も「政令問題の焦点」の売り捌きに全力を傾けていたが、全通を始めとする労働組合、学生図書協会等の学生団体を通じて、初版五千部の見通しもつき、新週刊紙の用紙申請も順調に進んでいるので、二期生も編集に戻り始めた。

十月十二日の月曜日、UPの理事懇談会が行われた。翌十三日、仲尾が大内教授に会ってその結果を聞いた。それは、

一、出版は、松尾武夫を理事に推薦して業務計画を作らせる。

二、新聞は、平岡、殿木の両理事に戸田先生を交渉委員として、用紙獲得を目指す。それでも駄目な場合は解散も止むを得ない。

というものであった。それで、すぐ仲尾と河内で戸田先生を訪ねた。先生の話は、見込みは殆どないが、今解散というのも少し酷なので、交渉ということにしたが、もう解散しかない。それを見越して銀杏クラブの野沢等が蠢動しているようだから、週刊紙で君達と対立することになるかもしれない。その辺を心得て慎重にやれ、ということだった。万事、飲み込んでいる親父という感じだった。

1093号に、(2)「天下り案は遺憾、協組、大学出版会に強硬声明」があり、声明書要旨が載せてある。それは、この計画が学生、現場を無視して進められたものであることを非難し、六項目の要求事項を上げているが、その中には、「役員には追放令該当者は排除されたい」という一項が含まれている。同号には、(2)「東大、中央委員、総長と会見、学生新聞と新制大学問題」もある。「用紙再分配措置に伴う東大学生新聞への割当分は中央委員会が受配するのが適当であるから推薦してもらいたい」と要請したのに対し、総長は「なお研究の余地がある」と確答を保留したとある。この後、協組の方では、六項目の要求に対し大内教授が理解を示したので、UPに移行するという基本方針

を決定した。これが現在の東大出版会となる。

この間、学内では十月一日に弾圧反対の全学学生大会が開かれ、九日に発表された次官通牒の撤回を要求する声が、大学法反対と重なって、教育復興闘争の大きなうねりを起こしていた。この情勢の中で、中央委員会はOP設立とUP粉砕を、その政治闘争の中に組み入れ、全学的な世論を盛り上げて行っていた。

十月二十一日に、松宮・戸田会談が行われ、一、UPへは用紙割当はできない、二、東大新聞がUPに移行したのであれば、用紙割当は漸減ではなく、直ちに停止される、ということが確認された。

このことは、最早、解散以外に方法がないことをはっきり示したものであった。編集部としては、新週刊新聞の設立と、学生新聞の創刊という、二つの目標しか残されていないことが確認されたわけである。週刊紙には卒業する二期生全員が参加し、OPの方には一年生全員が移ることが決定された。ここにおいて、解散闘争を強力に押し進めるためには、業務組合と一体にならないといけないということになり、編集部全員が業務組合に加入しようということになった。

十月二十二日にトラック会が招集され、組合加入を可決、これを受けて業務組合は二十三日に大会を開いてこれを承認した。そして当時の新聞の全国的な単一組織である「全新聞労働組合」への加入を決め、二十六日に全新聞東大新聞支部としての第一回大会が、職員、編集員全員の参加の下に開かれ、規約を決定し、七名の執行委員が選出され

た。業務から四名、編集部から三名である。編集部からは、田辺、川上、青山であった。

この頃、桜井からの情報で、佐々木監事が、新聞は十一月一杯続け、新週刊紙が成立すれば、東大新聞の定期購読者はこれに引き継ぐと、言ったことが伝えられた。又、戸田さんが心配していた野沢等には、週刊紙の申請の動きは全くないことも判明した。この時点では、事態は編集部の手定通り進んでいるように見えたが、この週刊紙の構想は、役員的人事、それと資金面で、間もなく崩壊する。その経緯は本筋とは関係ないので、省略する。然し、それが崩壊した後、仲尾以下の二期生六名は執念深くこれを追い続け、独力で翌二十四年四月に全員卒業とともに、銀座に事務所を開いて、週刊『大学新聞』を発刊した。これは一年で休刊になるが、そのことは記しておきたい。

十月二十八日の1065号に、(2)「東大、学生新聞は学生に」、中央委員声明書発表、天下りU・P粉砕へ」がある。これは「総長に対して再三その承認を求めてきたが満足すべき回答を得られないので二十一日大要次のような声明書を発表した」というもので、「声明書要旨」がつけられ、(1)「強力に準備を」と準備委員会設立の記事が続いている。更に(1)「大学出版会に反対、文・学生大会」もある。

三十日、組合大会が開かれ、議長に河内が選任され、理事会と早急に交渉すること、抗議文を発表することが決定された。十一月一日、声明書、要求事項を、大内教授に手交し、四日に理事懇談会を開くので、

組合代表も出席して欲しいと言われる。

十一月四日は1096号が発行された日である。この号には、(1)「割当庁で承認すれば、総長、新聞準備委に言明」がある。

一日委員会代表木下君が総長と面会、総長に対し承認を要請したが席上総長は大学新聞出版会と用紙割当庁でこれを了解し承認するならば、同新聞の設立を承認するとの言明があったというもので、設立の動きは具体的段階に入ったとしている。

四日の理事懇談会では、東大新聞社は本日をもって解散し、新聞出版の業務は総て停止する、従業員に対しては内規に従い一カ月の退職金を支払う、ことが通告された。

五日に組合大会が開かれ、この通告を拒否することを可決し、直ちに闘争委員会が組織された。委員長には仲尾が選出された。六日に大内教授との会談が行われたが、通告の意味を大内教授は、一、首切りというのではなく、実質的には解散の予告であること。

二、業務停止とは、新たな事業は開始しないということ。
三、財産があれば、退職金は増額する。

四、新聞は最終号を出してお互いの立場を発表したいが、これは理事会に諮った上で決めた。

と説明したのである。

この報告を受けて、編集部も闘争委員会も意見が割れた。財産評価を実施して退職金を決定し、それで解決しようという案、相手は大学

の権力機構なのだから、UP粉砕まで闘うべきであるという強硬派。これが両極端であったが、今までの経緯を考え、権力機構との闘い、学生の自主的言論機関に対する弾圧反対、という政治目標を原則とすることで、漸く収拾された。つまり、いずれは退職金の算定で解決するだろうが、解散は飽くまで大学側の弾圧の結果であるということを、大学の内外に徹底させること、その宣伝活動が当面の最大目標である、ということで見解が統一されたのである。

新聞社には何名かが泊まり込むことになり、当直表が作られた。然しこの段階で、明石事務長や村越東京弘報社社長等の働きかけも激しく、業務の中の年配者や女子職員で組合を脱退したり、退職する者も出て、この編集部主体の政治闘争方針が、組合員全員に支持されたというわけではなかったが、その四、五名を除き、編集部は勿論全員、業務も青年部を中心として大部分が、最後まで統制と団結を崩さなかったことは記しておかなければならない。

十一月九日に闘争宣言を発表、直ちに正門前と文学部のアーケードの横には十米に及ぶアピールのビラが貼り巡らされ、学内はもとより、お茶の水駅その他でもカンパ活動が開始されたのである。この結果、十日の各日刊新聞は一斉にこの象牙の塔の中やや意味不明瞭な争議を報ずることになった。勢いに乗った闘争委員会は、財産調査、購読者名簿確保のため、明石理事長を追い出して、業務管理を断行、タブロイド版の号外を発行することになった。自治会その他、学内の共闘組

織も急速に整備され、キャンパス全体がUP粉砕の波に浸されていった。そしてこれまでの経過を学外の関係者にも理解して貰うため、银杏クラブ会員、執筆者へのアピールを至急作ることにになり、十一日に発送された。

OP準備委員会の編集員募集には、自治擁連からも多数の応募があり、ここにも学内勢力の激突が見られた。選挙の結果、五十名中十五名が選ばれたが、一年生七名は全員当選し、鈴木平八郎が編集長となる。この経緯は、号外に(1)「東大学生新聞」として載っている。

十一日に書類保全の仮処分を申請。十二日に我妻教授から来てくれとのこと。大内、佐々木、宮沢の各教授も同席して、業務管理は認めないと言うので、逆に仮処分の申請の提訴状を読み上げ、五項目の要求を呈示した。

- 一、UP移行ではなく、東大新聞社の解散である。
- 二、交渉相手は、全新聞東大新聞支部である。
- 三、財産は総て処分し、退職金に当てること。
- 四、そのため組合代表を入れた財産評価委員会を設置する。
- 五、最終号を出す。内容は現編集部と理事会が協議して決める。

大内教授は、いずれも前から言っていたことだが、理事会を開いて正式に回答すると答えた。大学側からの連絡を受けて、十四日に银杏クラブの幹事会が開かれた。仲尾が戸田さんに会々と、大学側はもう争う意思は無いとのことであった。

十五日の月曜日、新しい攻撃のビラが貼られ、明石事務長がもう止めてくれと泣きついて来た。大内教授は五時からの理事会にかけると言ってきた。そしてこの日は号外の大組であった。一面の左下二段に、闘争宣言を含めた編集部声明を載せる予定であったが、情勢が微妙なため決断がつかず、結局、紙型には取ったが、翌日輪転機にかける前に鉛版から削った。そこだけ白く、空白のまま残されている。

十六日一杯待たされたが、これは奥山を説得するのに時間がかかったためと言われた。十七日に我妻教授から連絡が来て、文案作製に入る。これは四カ条に纏められたが、先の五項目を認めたものである。この覚書に、大内代表と仲尾闘争委員長が署名して妥結した。

十八日に組合大会を開いて承認し、闘争委員会を解散、執行部を改選して以後の整理交渉に備えた。編集部は手分けして、银杏クラブに挨拶して廻り、お茶の水駅で報告会を開いた。そして最後の編集会議を開いて最終号のプランを決め、担当を河内と川上にした。阿部は整理事務の責任者となり、仲尾達は週刊新聞の準備に当たることになった。

十二月二十二日から、二人で八頁の大組に入った。理事会の代表は岡部理事で、何のトラブルもなく大組は完了し、臨時印刷部の皆さんから上手になったと褒めて頂いた。組み残したゲラは、十行に足りなかった。外に出ると、年末にしては気味悪いくらい生温い陽気だったことが思い出される。

終刊号

一面の真中に五段で「本紙無期休刊」のタイトルがあり、上二段を通して「休刊の辞」が活字が大きくして載せてある。

『東京大学新聞』は本号をもって無期休刊する。

思えば一九二〇年十二月廿五日『帝国大学新聞』として創刊してから廿八年、日本の歴史が旋風のように旋回して行ったこの一世代の間、本紙はさまざまな抵抗を排除してこの国における學術文化の代表的総合紙としての地位を確保した。本紙への寄稿が論壇文壇への登龍門であるかのように思われたことさえあった。言論機関としての冷静な客觀的方針は堅持したが、国内における帝國主義の擡頭には敢然として起ち、軍事教練に反対し、大陸への侵略にたいしても能う限りの批判的立場を守った。そのためにこそ発売禁止の処分を受けたこともあった。およそ學問の自由と學園の平和を乱すものにたいしては武器に換えるに筆を以てこれに抗したことを古き読者は記憶されていると思う。

創刊当時旬刊タブロイド版であった本紙も一九三五年には週刊十二ページの紙面を完成し、新聞発行の余力を出版事業にも削いた。しかし大陸における戦争の進展はこの國文化の縮小再生産を余儀ないものとし、本紙もその例外ではありえなかった。戦時中各大学新聞を統合して変則的な『大学新聞』を発行しなければなら

ない時代もあった。

いま敗戦後三年、學問の復興と文化の再建は最大の課題の一つとして提起されている。このとき用紙削減という予測しない事情のため休刊する。それは本紙の使命にはおよそ背反する運命といわねばならない。長く本紙を愛読された学生、生徒、教職員など広範な読者にたいしてこゝに厚く感謝するとともに、われわれとともに本紙の期限をもたぬ休刊を惜しむ人あらば、われわれの新聞再刊の日、従来にも増した協力を切望して休刊の辞としたい。

その下に(2)「休刊にいたる事情、平岡敏男」、(2)「財産整理の経過、佐々木道雄」と本社理事の報告があり、「社告」が四段通してこれも活字を大きくして載せてある。

本紙は大正九年創刊以来読者諸氏をはじめ各方面の熱烈なる御支持の下に連綿として発行を続け、學術文化の進展に寄与したところ甚大であることは周知の事実であります

先般当局の方針により本紙に対する用紙割当が大巾に削減され、その數量を以てしては永年御愛顧を蒙った読者諸氏に配布することも不可能に陥り、本社の現従業員の生活を保証することも困難になりました

よって本社は瓦全よりも玉碎を撰び、情勢が緩和されるまで本紙を休刊すると共に図書出版等の附帯事業も暫く停止し、財産を整理して負債はすべて返却することに決定しました、本紙が統制

の犠牲となって二十八年の光輝ある歴史に一時でも幕を下すことは我国文化のために一大損失であります、事ここに至って洵に己むを得ない処置であります

別項『整理の経過』で説明されてある通り、さいわい本社の資産状態は相当健全で債権者に御迷惑を掛ける恐れは絶対になく、未経過講読料も二月末頃を期して夫々御返済致す予定で、鋭意整理を急いで居ります、この点に就ては御懸念なきよう御願申上げます

尚本社の財産は一応整理しますが、将来に備えて『財団法人東京大学新聞社』の解散は行わず、待期することに致しておりますが、若し類似名義の団体が生れても、本社と混同されぬよう御注意を願います

本紙休刊に当り多年御眷顧を賜った各位に衷心より感謝すると共に、再刊の日には一層の御支持を切望致します

財団法人 東京大学新聞社

先の「休刊の辞」は理事会、というより銀杏クラブの声明であり、これは謂わば事務局サイドのものである。「類似名義の団体」などという言葉は、勿論この後、二期生が学外で創刊する週刊『大学新聞』のことを意識していることは言うまでもない。

この横に三段の「東大新聞の歴史」の柱を立て、(3)「悔なき二十八年、松浦健三」がある。(2)「学生運動の中から」、(2)「復興の波に乗っ

終刊への経過と終刊号(河内光治)

て」、(2)「権威ある評論の確立」、と小見出しがつけられ、八面に続いて(2)「そして夕暮がきた」で終わっている。

二面は前号既出の「特集・大学法に反対する」の他、「東大新聞のこども」というタイトルで寄稿文を特集している。

戸田 貞三 学研と大学新聞

大内 兵衛 大学新聞を殺したのは誰だ

小野 秀雄 不則不離の私

川田信一郎 読者の立場から、友人一人去る

玉木 英彦 読者の立場から、正しい科学報道のために

三面は「一九四八年・回顧と展望、学界・学生運動」の特集である。二期生が分担執筆し、三段の「東大法文経アーケードで氣勢をあげる早大生」十月十三日」の写真を入れている。

学 界 荒廃する科学技術、相つぐ不正事件は何を意味する(T)

学生運動 社会運動に発展、反ファシズム運動の一翼へ(K)

厚生運動 運動の岐路に近づく、生活協議会で真けんな討論(Y・

A)

新制大学 適格170校にとどまる、文部省で二年制大学も考慮中
学生新聞 強い封建的束縛、自己確立に大学新聞連盟動く(春山)
そして、(2)「解説・東大不正入試事件」(K)、(1)「三島予科事件」が

ある。不正入試の方は、文学部の事務員が「学友会委員に告げたことから文事務室の不明朗さが明るみに出、更に各学部にも不正糾弾の火の手が上ることになった」というもの。三島の方は日大三島予科で共產黨員十名が退学処分に付されたという事件であるが、当局のメンバーが非常に自由党の色彩が強いので、問題の政治的な性質が非常にはっきりしている」というものである。

記事に(1)「明春発刊する東大学生新聞、直接講読受付け」があり、編集長鈴木君談がつけられている。四期生の鈴木平八郎である。

四・五面は、「あの頃のことども」と総題する先輩の追憶談である。

永井 了吉 創刊当時の思い出

奥山 信一 愛児に死別する思い

久富 達夫 五月祭と学生大会

久保勘三郎 学生運動の先駆

東 龍太郎 大学新聞と私

末松 満 帰らぬ二人

増田 寿郎 「好きな新聞」

中沢 道夫 増頁の頃

梅津八重蔵 第二放送との奇縁

築田 銓次 ロンドンより

殿木 圭一 「満洲事変のころ」

高原 四郎 新聞で学校を卒業

以上が四面で、「昭和二十一年当時の本社」東大安田講堂横」の写真が、二段で入れている。

五面は、右上に「本社十五周年記念会」昭和九年」の写真を入れ、

野沢 隆一 同人が蒔いた善意の種

平岡 敏男 交友断片記

遠山 孝 たのしかったあの頃

扇谷 正造 「糧と耗」

沢開 進 「私の大学」

高松棟一郎 白鳥の歌

花森 安治 (絵と文) ガス・ストロブ

瓜生 忠夫 思い出の否定

橋本 正邦 世界一のうぬぼれ

桜井 恒次 新イソップ物語

そして、左上三段囲みの横「各界に躍る群像、銀杏倶楽部の消息」(野沢隆一)が、全休の解説の役目を果たしている。

六面は、戦後編集部の頁で、「復刊から休刊を見送る」と総題され、

長谷川 泉 軍国狂騒曲の中で

加藤 寛 怪しからんこと

井出 洋 ファシズムとの闘い

そして、「らくがきちょう、終刊時の編集員から」と項を分け、

仲尾 和雄 卒業と愛惜と

河内 光治 週刊ジャーナリストの弁

川上 幸一 いかに生くべきか

青山富士夫 悪口を言う愛情

田辺 員人 思いつき

阿部 陽三 無題

と残っている二期生全員が書き、「編集部から」という挨拶が、活字を大きくして載せてある。

長い伝統を誇った東京大学新聞がなくなる。十年を越える愛読者もいる。全国の学生運動に果して来た役割も大きかった。東大新聞を学生時代も卒業後も盛り立てて来た先輩や、多くの諸君とともに、われわれは限らない愛着と惜別の念を禁じ得ない。

漸く高まって来た反動勢力と闘い、一切の虚偽を排し一歩ずつでも歴史の進歩の方向に進むことこそ、われわれの編集方針であった。その故にこそ全国に多くの進歩的な学生、知識層の支持を得たものと信ずる。

今は直接的には用紙割当の削減のために東大新聞はなくなろうとしている。妥協と後退の多い世の中に、若いジェネレーションの声を反映した真実を伝える新聞はなくてはならない。

幸にして、東大には学生新聞が発足しようとしている。そして

終刊への経過と終刊号（河内光治）

われわれ編集部は、長い東大新聞の伝統を受けついで学生、知識層の先頭に立つ週刊文化紙を別に創設したいと考えている。われわれの趣旨に賛同され、民主主義革命の推進力たろうとする読者諸氏は、まず〳〵の御支援と御叱声を賜ることをお願いする次第である。

東京大学新聞編集部

そして右十段の囲みで「敗戦後東大新聞の歴史、固く守った批判精神」（河内）がある。小見出しは、★復刊まで★、★復刊の辞★、★その後の歩み★、★休刊の事情★、★「夜明け前のさようなら」★、である。

更に左上六段の囲みで、「銀杏倶楽部会員名簿」が載せてある。

七面は、前号既出の「特集・二つの世界」である。

八面は、(5)「東大新聞二十八年」で、終刊号を編集担当した河内・川上が全合冊に目を通して纏めた。

右上は五段囲みの横「神代時代」（K）で、創刊号一面の写真を入れ、左下に(2)「甲の学部のある者は乙の学部に、何事の起れるかを知らず」と「創刊の辞」から引用したタイトルを載せ、「面白い当時の記事を紹介して、結びに『編集子ついに慨たんして曰く、現代を澆季こん濁の世と

すれば正に神代なり——”と。

(2)「青春期、大学新聞連盟で軍教反対の声明」は、「火焼百人一首」(関東大震災の頃)、「当代学生気質」、「学問は反抗するもの」(K)、「年を越えた顛落論争」、「鳩山文相辞職!」(P)の記事に、値上げ反対を叫ぶ学生群、滝川事件の学生委員会、の二枚の写真で構成されている。

次は(横)「転換時代」で、「今日は今日、明日は明日の風が吹く」(P)の記事に、「手工業時代去る(九・一一・五日号)」の漫画、「二つの広告」という日本資本主義発達史講座と資本論の広告の写真、(横)「◇外は嵐です◇—10・9・30日号—」の漫画で纏めている。

そしてその左に二段通し組みで、(2)「最後の進歩性を守る」と、「銀杏の大樹が一本ずつ欠けて行く様な受難の歴史が辿られ、「エピソード」が続く。これは、検閲、七生社の殴り込み、貰い下げ、理事長の交替、という四つを取り上げ、当時の重苦しい編集部の雰囲気や伝えられている。そして再び二段通し組みのゴチックで、“…そしてたそがれが訪れる、落日にも似た寂寞とした”てんらく”の嵐が吹き募る、暗くやがて暗黒の中に—”と、十五年三月の学消解散から十九年五月の休刊までの事実が記されている。三つとも(B)の署名である。

その他、左上に六段の囲み、二段通し組みで(横)「就職異聞」がある。見出しは(2)「関東一円をガッチリ固め、水ももらさぬ布陣ぶり」(K)というもので、昭和五年、六年、七年、九年、十四年の記事を引用して就職の変遷ぶりを伝えている。右横に、「稀有の不景気時代、就職率

僅に五割余」、「満洲景気」も来らず、依然たる停頓」、「生産力拡充の要請、一躍九割を突破、全学揃って新記録へ」という見出しの写真三葉が縦に並べてある。もう一つ、二段の「チームズ河のレース」の写真の下に、「淡青クルー、ベルリンへ」という三段の囲みもある。昭和十一年のポート部の活躍である。下二段にボックスで「経済学部三周年記念論文募集」が入れている。

結びは(横)「HOBIE BREWERY」、(2)「伝統は新たに……」(G)で、戦後の動きが纏めてある。ノーボエ・ブレイミヤ、新時代は来ている、と、川上と二人だけで編集した八頁号の原稿を整理し終わった時の感激を、筆者は四十年経った今もまざまざと思い起こすことができる。

(完)

〔付記〕紀要委員会の格別の御配慮により、予定より一年早く完結することができました。ここに厚く御礼申し上げます。お蔭様で、本稿に加筆訂正した「戦後帝大新聞史」(A5判三八〇頁)が不二出版(株)より五月に刊行されることになりましたので御報告致します。

(河内)